



千葉大学医学部同窓会報 第83号 題字 鈴木 五 郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉 (0472) 22-7171内線2038

桑田次男教授(微生物学)

最終講義および 退官記念式典開かる

桑田次男教授(昭和19年卒)は本年4月1日をもって停年退官されたが、去る2月18日(金)の午後、医学部本館大講義室で「つが虫病とその病原リケッチア」と題する最終講義が行われた。敗戦後間もない頃に先生が手がけられた講義室で医学部主催の桑田教授退官記念式典が盛大に挙

が、虫病の症状・疫学・治療等についてその詳細を話された後、学生諸君に対し「努めよ、未来は諸君の手に」という励ましの言葉を送って教壇を降りられた。

次いで、3月12日(土)には、同じ講義室で医学部主催の桑田教授退官記念式典が盛大に挙



記念講演をされる桑田次男教授

行された。薬理学教室の村山智教授の司会のもとに、萩原彌四郎医学部長の挨拶に始まり、井出源四郎学長、同門の長老中島元徳先生の祝辞、三木隆助教授の謝辞があり、記念品・花束の贈呈に続いて、主賓の桑田教授の挨拶があつて記念式典は滞りなく終了した。次いで桑田教授の「インタ

米澤利英教授(東北大学)

附属病院長に就任

3月31日をもって任期満了となつた附属病院長の後任には、麻酔学講座米澤利英教授の発令をみたので同教授に抱負をうかがつた。

前院長渡辺昌平教授の後をうけて本年四月一日付で附属病院長に就任しました。

医学部附属病院規程によりまずと、附属病院は診療を通じて、医学の教育及び研究を行うことを目指します。自己を律し、及ばずながら



私が千葉大学に着任して既に十八年を経ようとして居りますが、赴任時亡父に「千葉大学医学部は明治二十一年に第一高等中学医学部と始まり歴史を持っています。しっかりとやるように」と言われたことを忘れません。附属病院はこれを更に邁る歴史を持つて居ります。自己を律し、及ばずながら

の全力を盡し任務に励まねばならないと決意致して居ります。

附属病院は、昭和五十三年新病院に移り、その後研究棟も完成し環境も整備されて来て居りますが、歴史的な、また地域的な条件から地域医療と密接な関係が続けられ、その中枢医療機関的役割を持ち、また診療患者数が多いことなどから運営上の問題も多いように見受けられます。

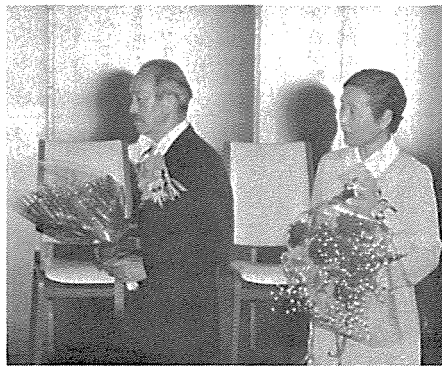
附属病院の目的を達する基本案件は医の倫理の追求にあると思ひます。診療はこれに立ち、充実した設備と高度な医療技術と知識が求められます。教育はこの環境で行われその実を挙げ、研究は附属病院の特長である基礎医学との密接な円滑な関係の上で優れたものがなされねばなりません。更に研究者が当を得た立場に立ち職務を果すことが重要なことと思ひます。

また附属病院は国立大学として運営されていくものであることは、教職員すべてが理解すべきで、この点から自己のやるべきことをそれぞれの立場で十分納得し、相互の信頼と協力を保ち行うことが重要と思ひます。

伝統ある本附属病院は、時代の進運に応じ発展が続けられねばならぬものですが、これには同窓の諸先輩同僚各位の御助言、御援助が大きな力となるものであります。るの は な 会員の善意に基く御協力を賜ることを心からお願い致します。

米澤 利英

米澤利英教授略歴。大正8年生。昭和17年第二高等学校卒。昭和20年9月東北大学医学部卒。東北大学医学部第二外科助教授を経て昭和33年岩手医科大学教授、昭和40年4月千葉大学教授(麻酔学)



祝賀会における桑田教授御夫妻

「フエロン研究十年」と題する記念講演があつた。昭和43年に先生が教授に昇任されて以来の研究テーマであるインターフエロンの細胞増殖抑制作用等の機序に関して教室員の業績も含めて解説され、聴衆に多大の感銘を与えた。同日夕刻、市内のレストランで記念祝賀会が開かれ、第三内科、稲垣義明教授の司会で、香月秀雄前学長、微生物学の先の講座主任であつた川喜多愛郎名誉教授、同級生の福岡誠吾千葉県がんセンター長や加納六郎東京医歯大医学部教授

らの挨拶があり盛会であつた。小林金市会長出張中のため、有益な副会長がるの は な 同窓会を代表して、格調の高いケネディーの言葉を引用し挨拶をされた。

各地るの は な 会 報 告

東京るの は な 会 新 年 会

昭和58年東京るの は な 会 新年会は、1月29日(土)、お茶の水、山の上ホテルにて開催された。当日は来賓として、勲一等を受勲された中山恒明東京女子医大消化器病センター名誉所長、勲二等を受勲された松本胖名誉教授、放送大学学長就任が予定されている香月秀雄前学長、井出源四郎千葉大学長、萩原彌四郎医学部長の五先生をお招きし、その祝賀会を兼ねて新年会を催した。

中村民比古会長より来賓五先生に対するお祝いの言葉があり、続いて、るの は な 美術展の海老原録郎(昭8年卒)、大村光(昭17年卒)、島田通男(昭9年卒)、山口宗彦(昭38年卒)の各先生より、それぞれ力作の絵を来賓各位に贈呈して頂き、(大村光先生は二作品)、又村瀬靖(昭30年卒)先生の美しい写真五点が贈られた。

来賓五先生より、ユーモアを交えて、近況、将来の抱負などを伺い、御祝いにかけた八〇名を越す満員の会場は熱気にあふれる様であった。

わざわざ千葉から御出席頂いた本部るの は な 会長小林金市先生の音頭で乾杯、懇親会に移った。

松戸るの は な 会

松戸るの は な 会 は 今年一〇〇名を数えるに至りました。この中には松戸に関係のあった数名の先生方も参加されておりますが、松戸市立病院には丸山卓治院長(昭22)以下五八名の会員が常勤または大学からの研修医として診療に従事し、医師会関係の先生方も四二名となり各方面で活躍されております。

松戸市立病院も県北の医療の中心として近隣の住民を含み広範囲の地域医療に対して日夜頑張っておりますが来年3月には小児医療センターが完成し更に充実するも



のとされます。

さて、昭和57年度の当るの は な 会 総会は本部より奥井勝二教授を

お招きして10月29日松戸ニューオータニにおいて五三名が参加して開催されました。

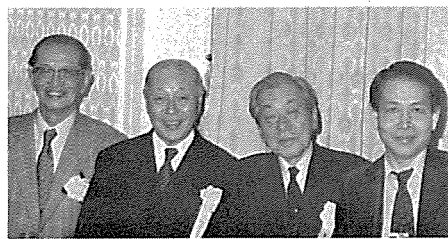
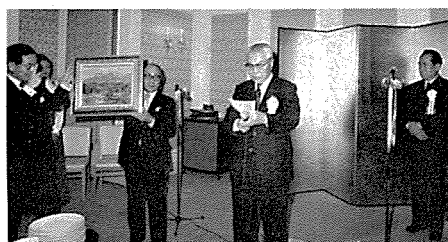
中山暢夫会長(昭21)の挨拶に続き幹事より庶務会計報告があり、ひきつづき奥井教授より大学および同窓会の動向と「乳癌の治療の現況」と題して最近の話題をお話ししていただき会員一同熱心に拝聴いたしました。

記念撮影に続き懇親会に入りましたが出席者が多く会場が狭く感じられるほどでした。

今年、新八桂台病院の院長になられた川口英昭氏(昭50)の紹介や先輩、市立病院にこられた新会員の自己紹介などがあり、益々く

つても、同じ東京で働く同窓生が集まる有意義な楽しい会であり、会員諸氏の御出席を御待ち申し上げる次第である。

神田 尚忠(昭32年卒)



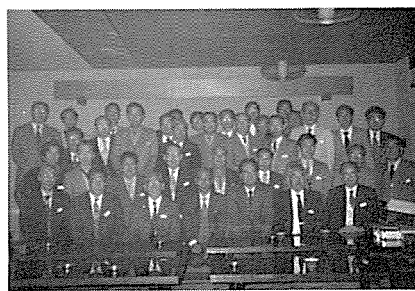
博(昭26卒)、下沢淳海(昭31卒)、上山滋太郎(昭33卒)教授のほか、多くの優秀な教職員が派遣され、更に関連病院として厚生連上都賀病院(院長石塚正治昭18卒)、塩谷病院(院長茂又眞祐昭22卒)、石橋病院(院長高村良平昭23卒)をもち、勤務医48名、開業医54名総勢102名の陣容で、毎年秋一回の同窓会を予定し、またゴルフ場に恵まれた県内で有志によるコンペも二カ月おきに行われ、お互に交流親睦の実をあげ、助け合い乍ら活躍しています。

最大に意を強くすると同時に郷愁の念を禁じ得ませんでした。千葉銀行前の京成電車の始発駅を御存知の先生方は余りの変貌ぶりに感嘆しておられました。

懇親会には、新会員の紹介、挨拶に次いで歓談に入り、学内の様子や、市内の変貌ぶりや、酒宴たけなわとなり、何時はでるともなく深更まで賑やかでした。一泊の予定もしておりましたが、医学部部長も又、奥井教授も明日の外科同門会の準備もあり、益々の大学の発展を祈念三唱、旧交を温め次回は約束して散会、両教授には、最終新幹線で帰業されました。以上近況をご報告致します。

追記・栃木るの は な 会の発展に貢献され、栃木県に於ける千葉大学活動の原動力でもありました茂又眞祐先生には、今度新設の船橋市立病院長として御栄転なさることになりました。益々の御発展と御健康を一同祈念して止みません。

柴崎 晃(昭28年卒)



栃木るの は な 会

るの は な 栃木支部は県内に、独自・自治の二医科大学を擁し、本市より堀江昌平(昭23卒)、安村美

第36回のはな四葉会(昭和20年医専卒)

総 会 報 告

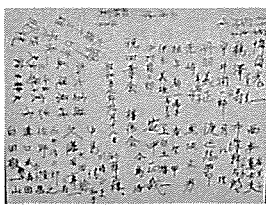
- 1、日時：昭和57年9月18日午後5時
- 2、場所：横浜市中区中華街華正樓
- 3、参加者：元長崎大学教授、高知女子大学長安中正哉先生御夫人



第36回千葉大学のはな四葉会

妻以下51名(内13名は御夫人)ハマの中華街、格調随一の華正樓にて開催。閉会後はブルーライトヨコハマを求めて二次会へ、宿泊はこれまた横浜随一の「ザ・ホテルヨコハマ」ここからの港の灯は日本一と激賞されている。

翌日は市内観光、名園三溪園の重文の建物の拝観を終へ午後元町、中華街でショッピングの後、さみ



だれ開散となる。明年度開催予定地は長崎市。(末永直光記)

二七会

(昭和27年卒)



二七会 30周年記念

また、戦後の混乱の色濃い時代に入學し卒業したわれわれも、今年で丁度卒業30周年を迎え、毎年、各地で持廻りで行っているクラス会を、今回は東京在住が幹事役となつて、30周年を記念して、10月2日・3日の両日に互つて行った。

初日は、東京浜町河岸、料亭生稲に44名(うち夫人7名)が参加し、小沢・服部両君の司会で、近況報告などを中心として会は進められたが、懐旧談に花が咲き、大川に映る夜景を肴に、一次会の3

時間は瞬く間に過ぎ、神田に設けられた二次会にも、やく半数の者が参加した。

2日目は、「江戸から東京へ」のテーマで、バスをチャーターして、有志による都内観光を行った。ガイド役は、歴史にうるさい小沢君で、皇居東御苑、湯島の聖堂、東照宮浅草寺伝法院の庭などを見学し、昼食は昔ながらの駒形どぜうを味わい、隅田川の川下りをし

みふみ会(昭和32年卒) 25周年記念会

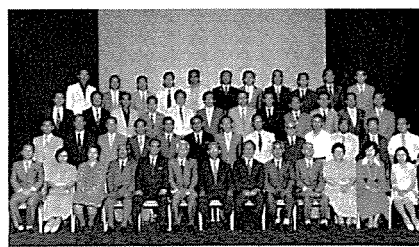
昭和32年医学部卒業生クラス会(みふみ会)の卒業後25周年記念会が昭和57年7月10日(土)に千葉市ニューパークホテル・アネックスホールにおいて開催された。私共のクラス会は卒業後ほぼ毎年のように開催されたとの記憶であるがこのたびは25周年を記念して現在お元気でいらつしやる当時教授として私共の御指導を下さった恩師の先生方をできるだけ多くお呼びしようということになった。幹事は千葉在住の藤本・村上・三枝及び小生となった。

御出席をいただいた恩師は、川喜田愛郎、小林竜男、柳沢利喜雄、中山恒明、三輪清三、北村武、竹内勝の諸先生であり、会員は44名の多数にのぼつたので会は盛大を極めた。

会では最初、恩師の先生方からの御挨拶から始まったが、25年振りに基礎・臨床の教授に再講義をしていただいた様で会員一同感慨は一しおであった。今回は集まった方が余り多いので遠い所から来ら

て浜離宮で解散した。また、15周年の時にならつて、今回も、30周年記念のカラ版アルバム「あれから30年」を発行したが、各自の写真、紹介記事と共に家族の写真もあつて、年頃となつた息子、娘たちの誌上お見合ひの形ともなった。

なお、今回は小林君が幹事となり甲府市で行なわれる。写真は当日のものです。(黄田 照光記)



みふみ会 25周年記念

川島恂二先生(昭20卒)

昭和57年度

日本学術優効賞受賞

川島恂二先生(茨城県古河市)は去る11月1日、日本医師会の日本学術優効賞を受賞された。開業のかたわら、永年にわたりアオバアリガタハネカクシに関する研究をつまねて来たがその功績が認められ全国で5人の受賞者の一人となられた。11月7日には茨城県の学術優効賞も受賞され二重の栄誉になられた。先生はまた医学史の研究者としてもユニークな業績をつまねている。

埼玉のはな会

(昭和57年9月15日)

敬老の日、埼玉のはな会が浦和で開催され、多数の会員の出席をみてなごやかな半日が過ごされた。萩原医学部長の故郷であつた。御兄弟が親しく席を共にされた。埼玉医大小児科の前田教授(昭26卒)および本学部・薬理の村山教授(昭26卒)の学術講演があつた。

昭和26年卒

(昭和57年10月24日)

結束の固いこのクラス会が、今回は松岡真平、小林繁次両君が幹事となり、秋晴れの池袋、サンシャインプリンスホテルに集った。何ということはないのに、和気あいあい、例年の如くに今回もクラスの半数以上が集った。昭和58年度は四家正一郎、糸井久雄両君が幹事をつとめることになった。

お願い 昭和57年度名簿の訂正

- 一七一頁 高田功(昭42)住所 千三六浦和市常盤1の3の17
- 〇四八八(31)〇二三(産婦開業)
- 二二九頁 第一病理学教室・追加 小倉久文 千一七〇豊島区西果鴨 1の32の18
- 飯高宏 千一六七杉並区下井草 3の38の10
- 二九七頁 索引 佐藤洋(昭19) ・印を削除
- 二七八頁 索引 飯高宏(病1) ・印を削除

地区別名簿 三頁

茨城地区追加 田崎敏郎(昭11)

★のはな会便り、クラス会便り等はせいぜい八〇〇字位までにまとめて下さい。全員の記念写真などはみにくくなりますので御了承下さい。

評 長谷川英夫著 「軍医のみた ガダルカナル島戦」

長谷川英夫氏(昭和10年卒)から先年「ガ島戦ある軍医の手記」を読ませて頂いたが、今回は著者が、ある参謀の著書、ガダルカナルを読んで、多くの虚偽があり、殊に自身は参謀として戦争を指導したのに、敗戦後第二師団将兵を悪口と云うよりも、これがガ島戦の真実として歴史に固定されることに憤を以て、稿を新たにされたものである。従って読むのに時間がかかった。何か身内の人の死んで行った刻明な病症を読むような想いで一頁一頁深刻な衝撃と戦慄を覚えながら一応読んだ。読む事ですらこの衝撃である。まして数年にわたり稿を改められた長谷

川氏は、正に即死去私の苦業に相違なかったらうと頭が下るばかりである。

まず見開きの赤紙にはまぎく数十年前の戦慄が蘇った。多分戦後の人々にはこの薄い一枚の重みを感じするような事はないだろう。これが歴史というものかも知れない。この戦記を読んでいたら、何か以前に似た様な記憶が蘇がえった。新田次郎氏の「八甲田山死の彷徨」だった。一つは風雪に立ち向った戦士の物語であり、これは闇とジャングルの中で魔のような物糧の大軍との戦記である。いづれも精神だけで果す事の不能な物語であり、それを指導した向うみずの悲劇である。わが同窓の多く

評 大谷克己著 「千葉の牛頭天王」

七天王塚のあたりは皆が恐れ半ば信じながらも、その塚の由来も牛頭天王が何であるかも知れない人が案外多い。第3解剖学教室大谷教授が「千葉の牛頭天王」なる書をまとめた。33の文献を引用し、又自らも実地に検証して塚の造営された時代や信仰の背景を、実に理論的に考証あるいは推論し

ている。実によく調べたものだと思心させられ、又大谷教授の歴史への造詣の深さに感服させられる。それだけに読む側にも歴史に関するある程度の興味と知識がないといつていけない面もあるが、玄鼻山に関係する人々の必読書と思う。

(T)

評 武野良仁著 「肺のパンク自然気胸」

武野良仁氏(昭和28年卒・日産厚生会玉川病院外科医長)には、「肺のパンク・自然気胸」(45の質問)という96頁よりなるB6版の小冊子を鳳鳴堂書店より出版した。同氏は自然気胸について、我が国の第一人者であり、新聞・テレビ等にもおなじみの方である。



がこの戦争で散って行った鎮魂記でもある。「誠にやむを得ざるものあり、豈朕が志ならんや」で始まり、多く生霊のうめきの中に「万世の為に平和をきづかんと欲す」で終った大戦とは何んであつたらうと、読み終ってから数日の間魂が抜けた。「もう繰り返しません」の誓の言葉の唇が乾く間も

なく、何か怪しげな気配のある今日、戦争というものを知らぬ時代の人々にも、この一冊の本の重さを知っていただけるならば散華された人々も靖国に詣でる以上に諒とされるに違いない。

発行所黒目書房・電話〇四二四(七二)六七七二・定価一五〇〇円(筒井 栄記・昭6卒)

句集 評

句集「遅の井」 山本柊花著

著者山本柊花(野実)氏は昭和19医専卒。学生の頃より加賀谷凡秋氏に師事し、やがて句会会の先輩として現在俳壇で御活躍中である。一貫して写生と花鳥諷詠という俳句の大道を歩んで来られた氏の能度は、跋に述べているごとく、善福寺池の水源地として湧出し難かつたが、今も滾

滾と湧き続けている井泉にちなんで名付けた本句集に良く表わされている。

(増田 善昭記)

四金会(晴)の叙勲祝 に出席して

水戸市 丸山 秀太郎(大正9年卒)

昭和57年12月10日、中山恒明先生勲一等その他三氏の叙勲の名譽ある祝賀会が同窓会館で開催されたという通知に接した。中山先生には胃癌の疑いで50才代に手術を受けたこともあり、御無沙汰がちの同窓会にも義理が立つと思つて、水戸からでは遠方また老体でもあり、しかも夜の会でもあり、少し迷っていた。二三日前に同窓会名簿が送られて来て、ひとといて見ると自分が理事の筆頭にあげられていた。これではどうしても参加せざるをえまいと速座に決心した。開会五時半少し前に二時間近くを要して大学に到着した。うす暗い中を門衛に云われるま、進むと明るい会館があった。会場に案内されると、30数人の同窓生が叙勲の先生方を上座にすえて集つてあられた。井出学長が「丸山さんよく遠方から来られましたね」と小生を欠席の中山さんの座の傍に据えて下さった。隣の名譽会長鈴木五郎先生に、85才になる丸山先輩がこんなに元気よく来会さるものに俺は老体だから引込むといつもいつも云つていては手前勝手である。例えば「呼吸はどこでしているのしょう?」「自然気胸という病気を知っていますか?」云々というような質問を提出して、それらについてわかり易く、写真・グラフ・表等を沢山つかって解説している。一般向ならびに専門外の医師にも目で楽しめる著書である。同窓会本部に寄贈された。定価一〇〇〇円。(奥井 勝二記)

第55回解剖慰霊祭と

第2回千葉白菊会總會開催さる

恒例の解剖慰霊祭が昭和57年10月16日午後2時より、遺族・医学部・看護学部教職員・学生および来賓各位多数の出席のもとに医学部記念講堂でしめやかな内にも盛大に行われた。今年合祀された御霊は系統解剖58体、病理解剖34体であった。

また、同日午前中には千葉県における篤志解剖献体団体である千葉白菊会(会長・斎藤利一氏)の總會が開催された。会長・医学部長の挨拶に続いて、第三内科稲垣教授の「心臓病」についての講演があり、出席した80余名の会員はメモを取りながら熱心に耳を傾けていた。医学教育の為に死後に献体をしたという篤志家の生前の意志を法的に保護するために、献体登録に関する法制化の実現をめざして解剖学会と篤志解剖団体は地道な運動を続けている。

訃報

最上 清幸氏 (大正4年卒・56・12・16死亡)	竹内 端弥氏 (昭和27年卒・57・5・3死亡)
鈴木 保氏 (昭和2年卒・57・3・12死亡)	小松千代雄氏 (大正14年卒・54・11・28死亡)
川上 理一氏 (大正6年卒・57・4・25死亡)	大屋 正夫氏 (大正14年卒・55・11・23死亡)
斎藤秀三郎氏 (明治30年卒・不明)	佐藤 哲郎氏 (昭和27年卒・57・1・31死亡)
佐藤理三郎氏 (大正11年卒・57・3・1死亡)	岡安謙之助氏 (大正12年卒・56・9・26死亡)
棚橋 文雄氏 (昭和9年卒・57・5・10死亡)	川上 茂義氏 (大正12年卒・57・4・28死亡)
大沢 忍婦氏 (大正11年卒・57・5・19死亡)	笠松 猛氏 (昭和15年卒・57・3・22死亡)
松本 元氏 (大正14年卒・不明)	太田 元政氏 (昭和14年卒・56・3・26死亡)
山本震二郎氏 (昭和23年卒・57・1・29死亡)	小林 章男氏 (昭和31年卒・57・5・13死亡)
土谷 忠夫氏 (昭和6年卒・57・4・11死亡)	石井 誠一氏 (昭和30年卒・57・6・6死亡)
遠藤仁一郎氏 (大正10年卒・57・2・21死亡)	河野 寿氏 (昭和30年卒・57・6・18死亡)
石母田 昇氏 (大正8年卒・57・57・)	

沢田 芳見氏 (大正5年卒・57・7・10死亡)	須原 耕三氏 (大正12年卒・57・7・5死亡)
中村 精一氏 (大正7年卒・不明)	柿田 俊光氏 (大正14年卒・不明)
田沢 敏夫氏 (昭和24年卒・57・9・6死亡)	木村 正雄氏 (大正14年卒・不明)
岩津 俊衛氏 (名誉教授・57・8・21死亡)	工藤 道夫氏 (大正14年卒・不明)
高塩 豊太氏 (大正14年卒・56・11・1死亡)	貞光 利造氏 (昭和3年卒・57・死亡)
松田隆太郎氏 (昭和元年卒・57・6・4死亡)	杉田 佳政氏 (昭和10年卒・不明)
伊芸 重孝氏 (昭和25年卒・54・4・21死亡)	高野 滋雄氏 (昭和10年卒・不明)
関根 秀雄氏 (昭和13年卒・57・9・9死亡)	後藤 順成氏 (昭和16・12卒・57・7・9死亡)
佐藤 義房氏 (大正12年卒・57・7・17死亡)	百瀬 健氏 (昭和16・12卒・56・7・31死亡)
	後藤 旭氏 (専18年卒・不明)
	石橋 常義氏 (専20年卒・不明)
	浦野 英彦氏 (大正9年卒・57・3・11死亡)
	志村 正三氏 (大正9年卒・57・7・23死亡)
	須藤 克己氏 (昭和8年卒・55・死亡)
	鏡村 佑一氏 (昭和2年卒・不明)
	小林 晴生氏 (専19年卒・57・7・)

山野 正氏 (昭和5年卒・57・9・22死亡)	加藤三郎氏 (大正13年卒・57・10・14死亡)
海野 幸胤氏 (大正11年卒・57・8・17死亡)	池田 正氏 (大正6年卒・不明)
	多田 愛治氏 (明治35年卒・不明)
	寺島 忠敬氏 (明治35年卒・不明)
	梅里 好文氏 (明治44年卒・不明)
	足立 郁夫氏 (昭和45年卒・57・10・29死亡)
	山岸 礼三氏 (明治33年卒・不明)
	中原 毅氏 (昭和16・12卒・57・12・21死亡)
	後藤 忠喜氏 (昭和16・3卒・57・)

高瀬 明氏 (昭和36年卒・57・12・24死亡)	横田 俊一氏 (昭和23年卒・58・1・12死亡)
田中 直三氏 (昭和12年卒・57・11・25死亡)	赤木 元藏氏 (大正11年卒・57・12・29死亡)
大宮 正一氏 (大正13年卒・57・12・26死亡)	雨宮 孟氏 (昭和4年卒・58・1・29死亡)
	奥田金四郎氏 (大正13年卒・58・2・23死亡)
	浅井 恒宏氏 (昭和25年卒・58・3・1死亡)

昭35卒、中川康次氏（第一外科・昭36卒）、前川岩夫氏（産婦人科・昭48卒）、小野田昌一氏（第二外科・昭40卒）、大木健児（整形外科・昭40卒）。

【転出】北村 温講師（泌尿器科より国府台病院・昭38卒）、武者広隆講師（第一内科より国立千葉病院・昭40卒）、武田清一助教授（第一外科より船橋中央病院）長谷川洋機講師（麻酔科より東京厚生年金病院・昭43卒）、前川岩夫講師（産婦人科より沼津市立病院）、堀江武助教授（脳外科より自動車事故対策センター・昭35卒）、宮坂 斉講師（整形外科より長野県立須坂病院）、赤井淳一郎講師（神経内科より国立久里浜病院・昭38卒）、慶大院。

【停年退職】三浦義彰教授（第一生化学）。

人事異動 昭和57年11月2日（昭和58年3月31日）

【昇任】一、助教授 山浦 晶氏（昭40卒・脳外科学、篠原信賢氏（昭45卒・免疫研究部、瀧沢弘隆氏（昭40卒・肺研第二臨床研究部一、講師 安東昌夫氏（昭50卒・麻酔科学）。

【転任】瀧沢弘隆氏（肺研第二臨床研究部・助教授より塩谷病院院長、神田健郎氏（第一生理学・助教授より東京都老人総合研究所基礎第一生理部門室長・昭43卒）。

（昭和58年4月1日以降は次号へ）

第84号は来る9月末発行を予定しています。

加藤教授(微生物第二講座) 吉田教授(内科第二講座)

着任される

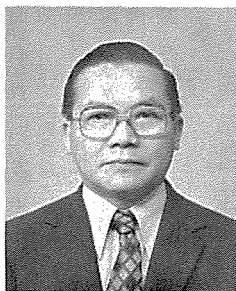
昨年初夏以来空席であった微生物学第二講座教授として東京大学医学部研究所より加藤教授(北大・昭25卒)が4月1日付で着任、また自治医科大学の吉田教授(東

微生物学第二講座 教授就任にあたって

加藤 巖

このたび、東京大学医学部研究所から千葉大学医学部に配置換えで微生物学第二講座を担当することになりました。組み換え遺伝子工学ブームの折から国立大学間の細胞融合による配置換えも人事交流の一つのパターンとみることができそうです。

ふり返りますと、私の経歴は昭和二十年、海軍兵学校を卒業、同二十一年、北大医学部入学、卒業



後、北大医学部生理学教室の大学院生となり人工血液の研究に四年間、同二十九年から東大伝染病研究所に入所しました。研究所生活三十年間、細菌感染症に果たす細菌毒素の役割を中心に、特異活性

をもった細菌毒素の毒作用機序の研究一筋にやってきました。

医学・生物学における微生物学の研究は重要な位置にあり、学問の細分化に伴い医学部の微生物学講座の細菌学・ウイルス学の二本立てが長年、要望されているところ

です。本学部は歴代の学部長をはじめ教授会のご理解とご協力によって、幸いにも一昨年より細菌学を主とする講座が誕生しました。ここでウイルス学との両車輪が

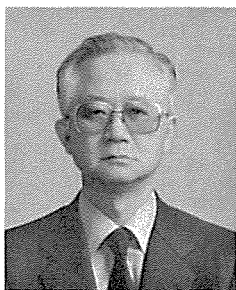
来たことは千葉大学の医学・生物学における微生物学関連領域とくに感染症の予防・治療や免疫を含む生体防衛機構の研究で相互の共同研究や知識・情報交流の運び屋の場としてますます貢献することを要望されていると思います。

経験と知識を背景に、そして若い時代に鍛えた強健な身体を張って細菌学教育の場で存分に教えかつ自分も学ぶ姿勢で臨みたいと考えております。

今の当教室は不完全講座で人手はないけれども基礎・臨床医学の別なく研究者相互の心の触れ合いと人の和を大切に時間をかけて共同研究体制をつくって成果をあげるよう努力したいと思ひます。また一方、若い研究者には学問研

第二内科教授に就任して

吉田 尚



五月より千葉大学第二内科講座を担当することになりました。

明治31年に井上善次郎先生が初代教授に就任されて以来、柏戸・岡田・佐々・堂野前・田坂・斎藤・熊谷と内科の泰斗である諸先生が主宰され、百年以上になたり、赫々たる業績と伝統のある教室を引継ぐことになり、責任の重大さを痛感しております。幸い、前任の熊谷教授とは専攻する分野が近く、従来から種々御指導を頂いておりました。免疫・アレルギー、内分泌・代謝、血液、消化器など各分野につき、熊谷教授の築かれた土台を基に、更に発展させるべく努力する所存です。

最近では内科学の分化が進んだばかりではなく、研究の分野では、生物学第二講座を担当するにあたって私の抱負は、学生・大学院学生さらには若い研究者に、これまで求め歩んでえられた自分の研究この傾向を反映して、メジカルサ

究の厳しさを教え、国際的飛躍へのビ・アンビシャス精神とそのアプローチを指導し、本学部細菌学講座の研究の特徴を築き上げる土台づくりに微力の身ではありますが頑張りたいと思ひます。

同窓会の皆様の一層の御力添えをたまわりますよう、何とぞよろしくお願い致します。とくに細菌学領域の同窓会の皆様は大いにこの講座をご利用下さい。

術とヒューマニズムに徹した内科医になることを私共の教室の目標といたします。

個人的なことになりますが、私は昭和29年に東京大学医学部を卒業し、東大第三内科で中村教授、中尾教授につき内科学を学びました。昭和47年から本年4月までは、栃木県にある自治医大において、内科学、特に内分泌代謝学を専攻してまいりました。しかし、もともとは千葉県市川市の生れです。父は市川で開業しておりました。現在では兄がその後を継いでおります。千葉に参りまして、子供の頃からなじんだ景色をみますと、なんと心なごむ気がしております。私を育んでくれた郷土で仕事ができますことは私にとり最高の喜びです。

今後はるのとは同窓会の方々には何かとお世話になることが多いと存じます。私としましても、皆様に少しでもお役に立つことがあれば最善を尽して行いたいと考えております。御指導、御鞭撻の程、お願い申し上げます。

微生物学第一講座

清水文七教授

近く着任

停年退官された桑田教授の後任として、本学昭和33年卒の清水文七先生が選出された。現職、国立予防衛生研究所ウイルス第四室長としての業務の引継ぎ等の都合より、現在のところ来る9月1日付で発令、着任の予定とす。

編集後記

○会報83号をお届けします。57年度内に発行と当初考えておりましたが、年度の変わり目はやはり皆多忙でつい夏頃となつてしまいましたことをおわび致します。編集部一同新しい気分で張切りますのでよろしく願ひします。

○るのはな台の模様変更も時折報じてまいりましたが、当局の御配慮もあり、亥鼻地区共同利用施設の医学部附属動物実験施設・亥鼻地区体育館等の施設も完成、医学部・病院周辺の様変わりもあり、学生・文部教官その他の仕事も能率があがると期待しております。すぐれた環境に居ても、これを利用する各人の心構えが肝要と考えております。脚下照顧という禅の言葉の思い起してあります。詳細は次号に掲載の予定です。

○医学部人事少しづつですが、変りつ、あります。微生物第二・加藤教授、第二内科・吉田尚教授はすでに着任、微生物第一講座の清水文七教授の発令も近く、また病理学第一講座の教授選考もすすんでおります。また編集委員村山智教授は六月一日付で千葉大学評議員になられました。(奥井勝一記)

「千葉大学新聞」「いのはな新聞」等は同窓会とは無関係です。また学生自治会による「あのはな祭」の行事一切についても本同窓会は直接の関係がありません。従来いろいろの混乱が起つたようですので重ねて御注意申し上げます。(編集部)